

## 疾患酵素学研究センター

I	研究の水準	.....	研究 7-2
II	質の向上度	.....	研究 7-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目 I 研究活動の状況

#### 〔判定〕 期待される水準にある

#### 〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の論文発表数は平均42.8件（うち国際学術誌は平均25.2件）、国際学会発表数は平均17.2件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業等の外部資金の採択状況等について、科学研究費助成事業は平均18.7件（約6,190万円）、受託研究は平均7.7件（約1億2,700万円）、共同研究は平均7.5件（約2,280万円）、寄附金は平均19.5件（約3,690万円）となっている。
- 特許出願件数は、平成21年度の2件から平成27年度の7件となっている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間における共同利用、共同研究課題（公募型、公募型以外）の実施件数は平均52.3件、参加人数は平均876.8名となっている。
- 第2期中期目標期間における学術資料の提供状況について、保有数は共同研究を行っている他研究機関から、リスクマネジメントの目的でバイオリソースの移譲を受けたことにより、平成22年度の229件から平成27年度の789件となっている。また、第2期中期目標期間の利用件数は97件から118件の間を推移している。なお、文部科学省共同利用・共同研究拠点の期末評価判定を踏まえ、適切な対応が望まれる。

以上の状況等及び疾患酵素学研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### 〔判定〕 期待される水準にある

#### 〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特にゲノム医学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、ゲノム医学の「自閉症スペクトルの原因遺伝子の探索」の研究があり、自閉症スペクトルの患者を持つ家系について国際共同研究によりエクソーム解析を行い、自閉症原因遺伝子を多数同定することに成功しており、研究論文は神経研究分野におけるトップジャーナルに掲載後、被引用回数は2年間で98回となっている。
- 社会、経済、文化面では、特に感染症内科学、小児科学の細目において特徴的な研究成果があり、国際特許を含む特許の申請、取得、前臨床試験を行っている。
- 特徴的な研究業績として、感染症内科学の「インフルエンザ感染の重症化機序解析と、感染重症化の予防と治療法」の研究、小児科学の「アレルギーの発症メカニズムの解析と発症リスク評価」の研究がある。

以上の状況等及び疾患酵素学研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、疾患酵素学研究センターの専任教員数は27名、提出された研究業績数は9件となっている。

学術面では、提出された研究業績9件（延べ18件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は6割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績2件（延べ5件）について判定した結果、「SS」は2割、「S」は6割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間の論文発表数は平均 42.8 件（うち国際学術誌は平均 25.2 件）、国際学会発表数は平均 17.2 件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業等の外部資金の採択状況等について、科学研究費助成事業は平均 18.7 件（約 6,190 万円）、受託研究は平均 7.7 件（約 1 億 2,700 万円）、共同研究は平均 7.5 件（約 2,280 万円）、寄附金は平均 19.5 件（約 3,690 万円）となっている。
- 学術資料の提供状況について、平成 22 年度と平成 27 年度を比較すると、保有数は 229 件から 789 件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「自閉症スペクトルの原因遺伝子の探索」の研究では、自閉症の原因遺伝子を多数同定することに成功しており、研究成果を記載した論文は神経研究分野におけるトップジャーナルに掲載され、被引用回数は掲載後 2 年間で 98 回となっている。
- インフルエンザの治療法の開発や体外診断用アレルギー診断デバイスの開発等では、国際特許を含む特許の申請、取得、前臨床試験の実施、新聞報道等の成果をあげており、次世代型経鼻インフルエンザワクチンの粘膜アジュバント開発では、国際特許を 19 件取得している。

以上の第2期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果を勘案し、総合的に判定した。